

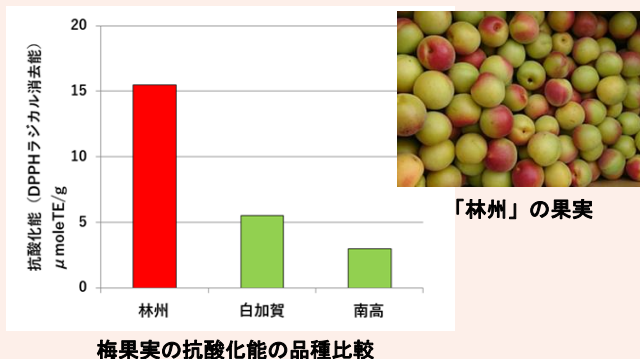
- 奈良県五條市は柿の大産地。柿生産者の多くが補完品目として梅を栽培。
- 「**林州**」は**県在来品種**。果皮が柔らかく流通に向かないため、栽培は一部に限られるが、「林州」が残存している周辺圃場では、県主要品種の「白加賀」等の着果が安定するため、授粉樹として再導入の機運が高まっていた。
- そこで、「林州」の特性を活用した産地振興を図るために、**生育及び果実品質を評価**した。また、関係機関同士をマッチングすることで**梅産地の振興について共通認識を醸成**した。

具体的な成果

普及指導員の活動

1. 「林州」の特性を評価

- 「林州」は中玉で着果は良好。県の主要品種と開花時期が重なり、交雑和合性もあるため、**授粉樹として有望**。
- 生果や加工品(梅干し等)の**抗酸化能は主要品種より高い**ことが判明。



2. 関係機関との連携を強化

- 奈良県、梅生産者組織、農業協同組合、加工業者(県内農業法人)が生産・流通・加工・販売について協議し、**「林州」を活用した産地振興について意思統一を図った**。

3. 栽培面積の拡大に向けた取組

- 「林州」の栽培面積は15ha。生産者の当品種への関心は高く、**改植や高接ぎ更新を行っており、栽培面積が拡大している**。



高接ぎ講習会

- 新品種・新技術活用型産地育成支援事業(産地ブランド発掘事業)を活用。

<平成28～29年>

- 「林州」の生育調査(開花期、果実品質等)
- 生果の成分分析
- 早期成園化に向けた実証圃設置
- 生産者、加工業者等の検索とマッチング
- 「林州」導入に向けた講習会の開催

<平成29年>

- 品種特性に応じた加工品の開発
- 加工品の成分分析
- 関係機関(県、生産者団体、農協等)を交えた意見交換会の開催

普及指導員だからできたこと

- 担当普及指導員が**果樹専門で当該地域を長く担当**していたため、**生産者の動向や「林州」の来歴、特性などを把握していた**ことが今回の事業化につながった。
- 日頃から連携している生産者、農業協同組合、農業法人等の**関係者を結びつける**ことで事業を効率的に進めることができた。

奈良県

梅在来品種「^{りんしゅう}林州」を活かした産地振興

活動期間：平成28～29年度

1. 取組の背景

奈良県五條市は柿の大産地であり、柿生産者の多くが補完品目として梅を栽培している。近年、県主要品種「^{しろかが}白加賀」、^{なんこう}「南高」等の着果が不安定になっている。これは、実需の関係で産地全体に占めるこれらの品種の割合が高まり、授粉樹となる品種の植栽が減少していることが原因と考えられる。

「^{りんしゅう}林州」は奈良県五條市西吉野地区の在来品種である（図1）。当品種が残存している周辺の梅圃場は着果が安定する傾向があるため、生産者から授粉樹としての期待が高まっている。しかし、果皮が軟らかくて流通に向かないため、栽培は一部に限られる。そこで、「林州」を地域資源とした産地振興を図るため、当品種の有用性の評価や、生産者や加工業者とのマッチング等を行った。



図1 「林州」の果実

2. 活動内容（詳細）

当活動は新品種・新技術活用型産地育成支援事業（産地ブランド発掘事業）を活用して実施。事業実施年は平成28～29年。具体的な活動内容は以下のとおり。

- 品種特性を把握するため、「林州」の生育調査（開花期、果実品質等）を実施。また、青果物の成分分析（抗酸化能、クエン酸含量等）を実施。
- 「林州」を産地ブランドとして売り出したい加工業者を検索。検索した加工業者と連携して加工品を開発。また、生産者、加工業者及び販売者のマッチングを行い、意見交換会を開催。
- 「林州」の栽培面積拡大を目的として、大苗育苗技術及び高接ぎによる品種更新の実証圃を設置。また、生産者に対して品種特性の情報提供や高接ぎ等による技術を指導。

3. 具体的な成果（詳細）

- 「林州」の特性評価

「林州」の果実は中玉で「白加賀」と比べると小ぶりだが、着果は極めて良好である。病虫害の発生は「白加賀」と同程度であった。「白加賀」、「南高」と交雑和合性があり、開花時期も重なることから、県内産地の授粉樹として適することが判った。「林州」の果実

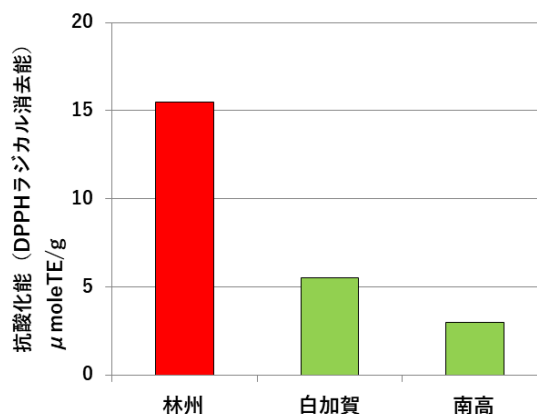


表1 抗酸化能 (DPPHラジカル消去能) の品種比較

の抗酸化能（DPPHラジカル消去能）を測定したところ、「白加賀」や「南高」と比較して高い値を示した（表1）。

○加工品の開発

「林州」に関心のある加工業者と連携して、「林州」を材料とした「梅干し」、「梅シロップ」、「梅肉エキス」を試作（図2）。これら加工品の抗酸化能を測定したところ、「梅干し」と「梅シロップ」は、「南高」の加工品と比較して高かった。加工品の一部については販売を行っている。



図2 「林州」の梅干し

○関係機関の連携

県、生産者団体、加工業者、農業協同組合が参集し、生産・販売・加工・流通について協議し、「林州」を地域資源とした産地振興について共通認識の醸成を図った。

○栽培面積の拡大

現在の「林州」の栽培面積は約15ha。当品種導入に向けた講習会等（図3）により、生産者の「林州」に対する関心が高まり、当品種での「改植用の大苗の育苗」や「高接ぎ更新」などが進んでいる。



図3 高接ぎ講習会の様子

4. 農家等からの評価・コメント（五條市西吉野町U氏）

梅は生産量が全国第3位であるにも関わらず、奈良県が産地として認知されていないのが現状。今後、「林州」が授粉樹の役割だけでなく、産地振興の起爆剤になることを大きく期待している。

5. 普及指導員のコメント

（奈良県農林部農業水産振興課・主査・植木勸嗣）

産地の課題である、梅の着果不良による反収減少は、生産者の栽培意欲の減退の要因になっていたため大きな課題だと考えていた。関係機関が梅のことで集まることはあまり無いため、今回の取組みを通じて県内梅産地の現状、課題について共通認識が持てたことは、大きな意味があると感じている。特に生産者団体については、着果不良対策について関心が高まり、自主的な取組みに発展しつつあるので、引き続き、産地振興にむけた支援を行いたい。

6. 現状・今後の展開等

新品種・新技術活用型産地育成支援事業（産地ブランド発掘事業）は29年度で終了したが、生産者に対しては、継続して「林州」の品種特性の周知を行い、栽培面積の拡大に努める。また、梅の着果不良対策を普及活動の重点課題として、「林州」の授粉樹としての評価を継続して行う予定である。